津高同窓会報

発行所
〒514-0042 津市新町3丁目1-1
津高等学校
同窓会事務局
TEL・FAX 059-229-7331
共立印刷株式会社

ご挨拶 …… 2
津中の思い出 …… 2
思いつくまゝに …… 3
退職してから …… 3
ドナウ川のさざなみ …… 4
水で思い出す非日常的日常 …… 5
「オハイオ州」って、アメリカのどこ？ …… 5
アートとの出会い …… 6
動物に触れて …… 7
離れて気付く〝ふるさと〟 …… 7
中小企業の採用課題を解決する …… 8
現役図書委員と交流 …… 8
音楽部全国大会金賞 …… 8
進路状況 …… 9
有造塾開催 …… 9
ボートと出会って …… 10
第九回ゴルフ大会 …… 10
第八回テニス大会 …… 10
各地で同窓会開催 …… 11
物故者 …… 12
平成三十年度総会・パーティー …… 12

向日葵のように輝いて ～永遠の十八歳～

同窓会長　飯田俊司（昭和36年卒）

会員の皆様には平素より同窓会活動にご支援、ご協力を賜り厚くお礼申し上げます。今年は異常気象が続き、記録ずくめの年になりましたが、集中豪雨、命の危険を感じる猛暑、相次ぐ台風、地震により列島各地で大きな人的、物的被害を蒙りました。今年だけの異常気象だと願わずにはいられません。

本年の同窓会活動は五月に東京同窓会、八月に本部同窓会、十月に名古屋同窓会、十一月に大阪同窓会が盛大に開催されました。

また、五月に第九回学年対抗ゴルフ大会、六月に海外旅行、十月にいずれも第八回となる有造塾とテニス大会を開催、会員間の親睦を深めました。

私はここ数年、海外旅行に行く機会が多く、今年はハンガリー、チェコ、スロヴァキア、ポーランドなどの中欧諸国とドイツ、リトアニアに行きました。各国とも首都が主な訪問先でありましたが、中世の雰囲気が感じられる旧市街の多くは第二次世界大戦で破壊されたものの、教会、古城、中心広場やさまざまな時代の建物が国民の粘り強い努力により復元されており、美しい景観を満喫しました。

しかしながら、正直なところ帰国後町並みや建物を写真で見ても、日付が入ってないと私の目には何処の都市か区別が付かないほど似通っています。その中で、リトアニアの杉原千畝記念館とポーランドのアウシュビッツ収容所跡の見学は、ユダヤ人にとっての「命のビザ」受給という人道主義と民族浄化のための大量殺戮という対極の非人道行為が心に焼き付いています。どちらも人間の行為であったことに複雑な想いです。

ハンガリーは七カ国、スロヴァキアは五カ国、チェコは四カ国、ポーランドは七カ国と国境を接しており、その時々の大国に国土が併合、占領、分割統治、割譲、場合によっては国家が消滅したり、あるいは国土が戦場になったりと島国の日本では考えられないような苦難の歴史を経験しました。ベルリンの壁崩壊によって、民主国家となり、NATO、ECに加盟、西側の一員として国際協調の下、平和国家として新たに歩み始めました。戦後七十三年経っても、国際協調とは程遠い極東アジアの現状とは、大きなギャップを感じます。

今年は津高の創立一三八周年でした。

再来年は創立一四〇周年、同時に陳川、三重櫻、津高同窓会の統合六十周年を迎えます。従来通り記念事業の実施を予定しておりますので、皆様のご協力をお願いします。

「Home」　絵　森田佳奈（平成13年卒）

タイトル・書　工藤雅俊（昭和45年卒）

ご挨拶

学校長　中川弘文

会員の皆様には、ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げます。日頃は、本校の教育活動へ格別のご理解・ご支援を賜り、心より感謝申し上げます。着任して三年、この間、県内外の同窓会、有造塾等の多彩な活動に参加させていただき、また本校を訪れる諸先輩のお話を伺う度に、皆様の母校への熱い想いと強い絆に大いに感銘を受けています。

津高校は「『自主・自律』の校訓のもと、高い知性と教養を持ったリーダーが育つ学校」として、地域から信頼される公立進学校をめざしています。新制高校制度が発足して七十年の節目の今、学習指導要領の改訂、主権者教育の推進や高大接続改革等、高校教育は大きな変革の時期を迎えています。本校は今年度から文部科学省の「スーパーサイエンスハイスクール」三期目の指定を受け、新たな五年間の実践研究をスタートさせました。「探究心」を育てることを大切にして、文系理系に限らず、全ての生徒が科学的な思考力、論理的な表現力や協働性を伸ばす活動を行っています。今年末には台湾の高校を訪問し、将来の共同研究を視野に、学習活動の成果を交流します。これまで以上に様々な場面で卒業生の皆様が活動に関わっていただき、先輩の背中を見ながら、生徒たちは眼を輝かせています。

部活動についても地道に活動を積み重ね、男子ボート部の県高校総体十一年連続優勝、音楽部の初めての全国大会出場等、さまざまな分野で多くの優秀な成績を収めています。本年度は全国高校総体が七月末から約一か月間、三重県を主会場にして開催されました。四十五年振りの県内での全国大会に、多くの生徒、教職員が競技種目の運営や補助に携わりました。本校では、唯一の学校会場として、ハンドボール競技が行われました。全国の多くの仲間との交流や、スポーツの魅力を間近で実感することで、生徒は大いに成長することができました。

ＡＩの時代、そして本格化する人口減少の時代です。この中では多様性への寛容や対話力を備えた人間味あるリーダー、新しい価値を生み出す人を育成する津高の役割はますます重要です。これまでの歴史と伝統、地域社会からの期待を大切にしながら、知性と教養、そして「志」を育む学校としての使命を果たすべく、職員一同、取組をすすめてまいります。

会員の皆様におかれましては、今後も母校に対するご支援をお願い申し上げますとともに、益々のご壮健とご活躍をお祈り申し上げます。

津中の思い出

清水一男（陳川22年卒）

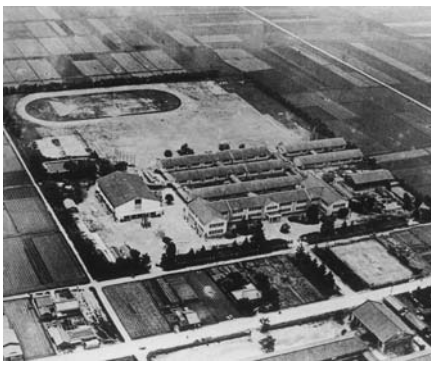
津中学校へ入学したのは、昭和十六年でした。明治時代の校舎と狭隘な小学校で育った少年には、津中の素晴らしいキャンパスは、只々感動するばかりでした。本館北側の前庭から、校舎間の中庭、そして周辺の防風林に至るまで環境整備は見事でした。古河から現在地への移転にあたって関与された先輩関係各位に対し、心から感謝を申し上げたい気持ちの持ち主の一人です。縁あって津中の運動会で、市内小学校対抗リレーに招待され、スタート地点に立ったとき、第二走者が遥かに霞んだ状態でありました。その時の印象は今でも強く残っております。

日々の登校は、近くの先輩に引率され徒歩で参りました。そして昭和十六年十二月八日に第二次世界大戦が始まり、家々から流れる戦時ニュースを聞きながらの通学でした。学校では、戦時中ではありましたが、県下の他校との対抗試合の出陣式などでは五年生の号令で全校生徒が集合させられ、壇上の先輩選手に、出陣歌、応援歌等を唱って送りだしました。ですから先輩各位の名前と顔は、概ね存じ上げておりました。掃除の監督も上級生でした。先生方、軍事教官も一切関与しない素晴らしい自治の校風であったと思っております。そして陳川の絆の原点を感じておりました。

一方、津中学校での授業は印象が薄く、二年生の終りには、食糧増産に従事させられ、これに伴う重労働で肋膜炎を患い、三年生に進級したものの留年しました。また、軍需工場勤務として津、四日市等で航空機の増産に従事した暗い時代でした。

それでも、青雲の志やロマンは忘れ難く、休憩時間には、みんなで夢を語り合いました。三重県には高等学校が無かったこともあり、北は北海道帝国大学予科寮歌の「都ぞ彌生」から南の第七高等学校の「北辰斜に」に至るまでの寮歌を数名で合唱したものでした。

第一高等学校の「嗚呼玉杯」「春爛漫の」などはあまりにも有名ですが、自分達のクラスメートで三兄弟のＫ君は、三人共第一高等学校に進学、特に次兄はラグビーの選手であり、一般の学生から見れば、いつ勉強されるのか？と驚くばかりの頑張り屋でした。そして二級先輩のＯさんは、北大予科の四季を讃えた寮歌と大自然、クラーク博士に憧れ、当時大阪から夜行列車で三昼夜を要し受験番号No.1を手に入れた、という逸話を聞いております。



63期・64期の有志数名は毎月、昼食会を行い、代表幹事の堀川君を中心に、津中に縁の深い「長谷川素逝」先生に関する話に始まり健康談議、ＮＰＯ法人の事など、情報の交換を行い身心の活性化に努めております。会の名称は「金華会」です。

思いつくまゝに

並川 貞子（三重桜18年卒）

現在九十二年のいのちを頂いています。このことに感謝の念の気持ちで一杯です。日常生活の中で、テレビ・ラジオ等で音楽・体操等が三重桜をなつかしむ時であり、先生、友達等教室の雰囲気まで思い出させてくれます。

昭和二十年六月二十六日、津市の米軍大空襲により、我が家（杉田）は直撃を受け、父、弟（津中二年生）、家を失いました。幸い私は家具類疎開の為、祖母の住む田舎にいたお陰で命拾いを致しました。と同時に人生観が変わりました。人、時間を大切にすると云う事。この時代を生きてきた女学生時代が「三重桜」という事になるのだと、思います。

戦後の大変な時代を経て、漸く世の中が落ち着いた頃、主人の名古屋への転勤があり、それに伴い私共家族も昭和三十一年末に社宅に住む様になりました。

その頃私共より先に名古屋に住まわれていた、三重桜同級生のお友達から「名古屋三重桜の同窓会」に入会のお誘いがありました。私の祖父をご存知の方で、それ以来三重桜同窓会の名古屋支部のお手伝いをする事になりました。

その後津高同窓会と三重桜同窓会が一緒になり今日に至っております。

ここ数年、毎夏津センターパレスで催される陳川、三重桜、津高同窓会にお招きを頂いています。

後輩の皆様の、学年を超えたむすびつき、男女一緒に行事を計画し、履行されている事に、素晴らしさを感じています。

現在私は油彩画作品製作に取り組む毎日を過ごしています。

三重桜の頃、仲良しの友達と一緒によくスケッチに出掛け、阿漕浦の堤あたりを描いた事などを思い出します。

テーマ・構図・色との格闘は果てしなく続きます。

退職してから

中津 忠夫（昭和34年卒）

六十五歳になった直後の株主総会で退任し、四十二年間のサラリーマン生活に終止符を打って十三年余りになる。毎日が日曜日となってこれから何をするかと考えた。まだ自分では若いと思っていたので、在職中に取得した資格（不動産鑑定士）を活かした仕事を始めようかとも考えたが、三十数年間実務から離れていて、今さら一から始めるのも億劫な気がして諦めた。

そうこうするうちに友人の依頼で高校の同級生のゴルフコンペの世話役をすることになった。気楽に引き受け今年で十三年一五七回になる。最初二十数人でプレーしていたが、亡くなったり、病気で少しずつ減り、今では十数人となってしまった。少し寂しいが、まだまだ続けようと思っている。毎月案内を出し、出欠を確認し、組合せをして当日に備える。その繰り返しだが、期日を忘れずに連絡することは、ボケ防止に役立っていると思っている。

ゴルフ仲間に誘われて、混声合唱の世界にも首を突っ込むことになり、早十四年目になる。合唱は初めてのことで、譜面もろくに読めず、音も隣の人にひきずられる始末であったが、男性が少ないせいもあり、今まで何とか続いている。

その合唱仲間と国語の勉強をしようという事になった。高校時代の恩師に頼んで、最初は著名な作家の文章を読むことから始めたが、先生の勧めもあり、俳句を教えていただくことになった。俳句ももちろん初めてのことで、歳時記を買い求め、一人五句を毎月の句会で先生に添削していただくことを続けた。毎月一回だが夜二時間の会の後、女性たちの作った料理を肴に、一杯を楽しんだ。六年ほどで先生がご病気とご高齢のため教えていただくのが無理となった。その後は、生徒同士で作品の批評をするなどして、いまだに続けている。相変わらず句会の後、料理に舌鼓を打ちながら酒を酌み交わしている。毎回会場に自宅を開放して下さる先輩夫婦に感謝している。

俳句を始めて二年余りたった頃、先生から句集を作ったらとの提案を受け、各自の作品十数句選び、文章も入れて句文集を作ることになった。知り合いの画家に絵の提供をお願いし、各自の絵や書も載せることにし、なれぬパソコンと格闘の上、自分たちで紙面を作り、印刷もすべて自前で製本だけは本職にお願いし、約半年かけて八十頁の待望の句文集が出来上がった。作品は汗顔ものだが、皆で協力した句文集はなかなかの出来で、良き思い出となった。それから約十年ほどたつが二集目はできていない。

合唱グループが津文化協会に加入している縁で協会の理事として、微力だがお手伝いをしている。特に川喜田半泥子の住居だった洋館・和館を千歳山に再建しようという活動に参加し、「ちとせの杜音楽会」の担当をして啓蒙と募金集めの手伝いをしている。

その他水墨画を習ったり、津高34年卒の同期会の幹事をしたり、暇を持て余すことなく、老後を楽しんでいる。

これからも元気で月に二～三回の飲み会も続けられたらと願っている。

同窓会旅行 平成三十年六月十九日～二十八日

ドナウ川のさざなみ

西村 淑子（昭和39年卒）

中学時代の運動会のダンス曲「ドナウ川のさざなみ」は、私の人生に深い思い出の曲となり六十年が経ちます。この舞台を確かめられることと、現在、多くの人々と交流し心を響かせ合って過ごす日々、「異国の人情」はどんなだろうと弾む心で参加しました。

飯田会長を団長に、八十一歳が最高

齢の一行十九名の旅は、同窓の誼みか、初日から温かで大きな家族のような安堵感を覚えました。

到着後、ブダペストのホテルの部屋より眼下に広がり流れるドナウ川を一望した時の感動は、今も蘇ります。

高速船でのブダペスト周辺の観光からスタート。ハンガリー最大の教会建築のエステルゴム大聖堂やアートの街センテンドレで楽しみ、夕食後はドナウ川の夜景クルーズへ。両岸に見える王宮や歴史的建造物は壮麗な輝きを放ち、次々と煌びやかで幻想的な風景が広がり、ブダペストの夜景が「ドナウの真珠」と称されていることに納得。

翌日、中世の歴史の詰まったブダペストの市内観光をし、昼食は、世界の著名人が訪れているという高級レストラン「ゲンデル」のハンガリー料理。来訪者の写真にエリザベス女王も飾られていて、格別の雰囲気を感じました。

その後、ユーロシティーという国際特急列車に二時間ほど乗り、スロヴァキアの首都ブラチスラヴァへ。この時は気温が十度も低く、厚めの上着を羽織り、城や教会を見学。緑の中を散策し、市街の真ん中を流れる雄大なドナウ川を目の当たりにした時、ヨーロッパを代表するこの大河をいつまでも眺めていたい衝動に駆られました。

そして、ルネッサンス・ゴシック・バロックなど中世建築が美しいチェコの首都プラハへ。国の木、菩提樹の葉音も心地よく、街全体が世界遺産で荘厳なプラハ城の教会や王宮。五二五メートルのカレル橋を渡りながら、ローマ時代からの奥深い芸術や文化が人々の間に生き続け今に栄えていることを実感しました。バロック様式などの彫刻が並ぶ橋の欄干で、触れると幸運が訪れるといわれる聖人ヤン・ネポッキー像に、私も世界からの観光客の後に並び触れてみました。

プラハ三日目の自由行動では、世界遺産のクトナー・ホラへ。墓地教会（納骨礼拝堂）は内部が四万人もの人骨で飾り付けられていて、ここにも長い歴史を感じました。夕方からプラハ地下鉄に乗ってのオペラ鑑賞は和服で。すれ違い際に「着物姿素敵ですね」と若い日本人男性に声をかけられた一瞬のことも異国の旅ならではの思い出。

中世の歴史の中に身を置いた旅の終りは、ザクセン王国の古都ドレスデン。ドレスデン城の百メートルにも及ぶ外壁の「君主の行列」の壁画は、一つ一つマイセン磁器タイルで作られていて圧巻でした。

その後、レトロなSL列車に乗って、十六世紀半ばにザクセン大公が狩猟用に建立した湖に浮かぶ美しいモーリッツブルグ城とワイナリーへ。

そして、帰路。ドレスデン空港へ向かうバスの中で校歌大合唱の後、飯田会長の挨拶の中に、「中欧の努力に学ぼう」とありました。私はこの言葉にはっとし、今回の旅の回答を得た思いがしました。

世代を超えて人々が心を繋ぎ合い、日本の素晴らしい伝統文化の継承・発展に、今できることに努力していきたいものです。ひとりひとりのたてる漣が大海へ繋がる「ドナウ川のさざなみ」を今後の自身の応援歌として…。

旅の企画等に心を尽くして下さった関係者に厚くお礼申し上げます。

水で思い出す非日常的日常

木澤　宏史（昭和45年卒）

今年の夏は暑かった。「喉に乾きを覚える前に水分補給を」とラジオ・テレビが呼び掛けていました。水は随分飲みました。という事で、水で思い出す体験です。

鉱山用機械を作る某機械メーカーに職を得ました。四〇〇トン積みダンプトラックが製品例（ちなみに日本の公道で見かける大型ダンプトラックは二〇トン積み程度のはずです）。機械の面倒を見るため何度か鉱山に出張しました。話は南米チリと米国での体験です。

チリは有数の銅鉱石の産出国です。積載量三〇〇～四〇〇トンのダンプトラックが五〇～一〇〇台二四時間三六五日稼働している大規模鉱山がいくつも有ります。私が出張した鉱山は採掘した銅鉱石をその場で精錬し純銅地金として搬出していました。設備が十全でないようで副産物の硫酸ミストが大気へ放出されます。鉱山が位置するのは標高三〇〇〇ｍの砂漠の盆地なので空気が淀み、陽が昇って地面が温まると空気は硫酸ミストとともに上昇、陽が落ちて地面が冷えると空気が降り来て再凝結した硫酸ミストが地表を覆い、朝出かける時には喉を刺激する霧が垂れこめます。

気温が高くなる日中には雲散霧消し雲一つ無い青空になるが、夕方になるとまた喉が痛くなり、毎日その繰り返し。喉がいがらっぽくなるので水が欲しくなります。しかし水道水にはヒ素が含まれているとの事で、現地の人に「飲むならピスコサワー」と言われました。言わば葡萄焼酎の炭酸水割りです。現場でピスコサワーを飲む訳には行かないので、朝ペットボトル入りの水を何ケースか買って鉱山に出かける毎日でした。暑くて乾燥した日中も水をよく飲みました。

次は、米国はアリゾナ州での体験。ここは銅鉱山ではなく金鉱山。精錬無し。アリゾナも砂漠です。ケヴィン・コスナー主演の映画『ポストマン』のロケをした場所です。そこで車両を試験していた時の出来事です。日中の最高気温は40℃を超え、作業現場はもちろん炎天下。ただ空気が乾いているのでムシムシしない。汗をかいた自覚が

於米国空軍博物館（オハイオ州デイトン市近郊）。背景は発動機付き飛行機による人類初飛行を成功させた Wright Flyer の複製です。

無いのに喉が渇いてくるのです。ここでも毎朝ペットボトル入りの水を数ケース買って現場に入ります。そんな或る日の昼休み、仕事仲間とくつろいでいたら、二人のメキシコ人が近寄って来ました。「水を飲ませて欲しい。」違法入国者です。メキシコから続く南北に走る幹線道路が有りますが、パトカーが巡回しているので、道無き砂漠を、国境から約一〇〇㎞、この二人は歩いて北上して来ました。ツーソンまで更に徒歩で一〇〇㎞行くとのことです。命がけだと思います。仕事仲間は私以外米国人。水を飲ます事に異論は出ませんでしたが、その後の扱いで意見が分かれました。「警察に通報」派と「見逃す」派。結構真剣な議論が暫く続き、結局「見逃す」事に落ち着きました。

どちらの体験も街で生活していると縁が無い日常です。

「オハイオ州」って、アメリカのどこ？

大寺 克司（昭和50年卒）

平成二十八年三月末、三十八年間に亘る教員生活を終え、私は、縁あって同年四月よりアメリカ・オハイオ州にあるオハイオ西部日本語学校長を拝命し、日本との時差十四時間という、ほぼ地球の反対側で日々暮らしております。

さて、皆さまは「アメリカ」とお聞きになって、何を思い浮かべられますか。自由の女神でしょうか、ハリウッド、それともトランプ大統領でしょうか。ともあれ、誰の中にも何かしらの印象のあるアメリカですが、「オハイオ州」がどのあたりに位置するかと問われると、なかなか正解が出てこないのではないでしょうか。私自身も最初に辞令をみて、オハイオ州ってどこだろうと思いました。

実は、オハイオ州はアメリカ北東部、五大湖の一つエリー湖に隣接してる「大いなる田舎」で、「聞いたことはあるけど場所が分からない」そんな印象のうすい州です。多くの方がイメージされるアメリカ＝都会＋高層ビルではなく、見渡す限り地平線までトウモロコシ畑が続く風景なのです。その昔、歌にあったような「電車も無い、バスも無い、タクシーも無い」つまり公共交通機関が全く無い、自家用車のみが移動手段の、ある意味不便なところです。その上「山も無い、海も無い」ただただ平坦で広い広～い大地です。そんな田舎ですから、買い出しに行くにも、ちょっとそこまで百㎞という感覚です。確かに高速道路は広くて無料、渋滞も無く一分一マイル走ることができるので、一時間で六十マイル(約百㎞)のドライブを楽しむことは出来ますが、車窓から見える景色はトウモロコシ畑に続くトウモロコシ畑です。アメリカに長く在住の方から聞いたところによると、どうもアメリカの八割以上が同じような「田舎」だということです。渡米するまでのイメージとは全く違う、アメリカのほとんどの地域は実は大いなる田舎、「ド」が付くほどの田舎だと分かってきました。

ところで、私がなぜこのようなアメリカの田舎で生活をすることになったかと申しますと、「在外教育施設への教員派遣制度」というものがあり、文部科学省から派遣されたというのが理由です。言葉を変えるなら、還暦過ぎた元教員でも海外勤務のチャンスがあるということです。歴史と伝統ある我が母校ですから、卒業生の中には今後海外勤務に挑戦してみたいと思われる方もみえるのではないでしょうか。ただ、この派遣制度、いささか苦しい点も付け加えておかなければなりません。それは、世界中にある日本人学校や補習授業校のどこに派遣されるか、自分では選択できないという点です。治安の悪い地域もあれば、極寒の地もあります。逆に風光明媚な場所もあります。ちなみに、文部科学省で私が受けた面接試験の最初の質問が「お酒の飲めない国もありますが、大丈夫ですか」でした。正直、百薬の長をこよなく愛する私は一瞬戸惑いましたが、「はぁ～、それは仕方がないことで、できれば飲める国にしたことは無いのですが、世界中どこの派遣でも構いません。」と答えた結果が今に至っております。

幸いにもアメリカの地ビールは美味しいです。今後多くの後輩の皆さまが在外教育施設で活躍されることを心より願っております。

（オハイオ西部日本語学校 校長）

アートとの出会い

内田 真由美（昭和55年卒）

私は、東京でフリーランスのアート・コーディネーターとして活動しています。現代アートを中心に展覧会やアートプロジェクトを企画し、コーディネートを行い、全国の美術館で開催、アートフェスティバルや芸術祭に携わり、イベントや広報、新聞や雑誌に美術の記事を執筆するなど様々な仕事をしています。津高校を卒業後、三重大学教育学部美術学科に入学、大学時代に朝日新聞の世論調査のバイトをしたことがご縁で、朝日新聞津支局に二年間勤務した後、三重を離れ上京しました。

東京では出版社を経て、フジテレビギャラリーに入社しアートの仕事を始めることとなりました。七年間多くの経験をさせていただき独立。最初に担当したのが瀬戸内海の直島にオープンしたベネッセハウス直島コンテンポラリーアートミュージアム(現)で開催された展覧会の広報です。直島の堤防の突端に設置されている草間彌生の黄色いカボチャの立体は、その展覧会のために制作された作品のひとつです。二〇〇一年に日本で初めて開催された国際現代美術展「横浜トリエンナーレ

「クサマトリックス 草間彌生展」2004年
（森美術館）会場にて　草間彌生さんと

2001」の広報、翌年「第2回大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレプレイベント〈天空散華・妻有に乱舞するチューリップ―中川幸夫〝花狂〟〉」、「荒木経惟東京人生」（2006年江戸東京博物館）などを企画、コーディネート。二〇〇八年より二〇一〇年にかけては全国七美術館を巡回した「ネオテニー・ジャパン―高橋コレクション展」、二〇一四年に名古屋市美術館で「マインドフルネス！高橋コレクション展決定版2014」など、精神科医で現代アートのコレクター・高橋龍太郎氏のコレクションを紹介する「高橋コレクション展」は、日本各地の美術館において今年までに十八回開催しています。

美術の仕事を始めた頃から最も長く、数多くの仕事を一緒にしてきているのがアーティストの草間彌生さんです。二〇〇四年、六本木ヒルズに開館した森美術館での「草間彌生クサマトリックス」は、各地から六本木ヒルズを訪れる幅広い世代の人々に、現代美術を見ていただきたいと草間さんと関係者と練り上げた、空間を体感しながら巡っていく展覧会で、来場者が五十二万人を記録し、アートファン以外の方々にも草間さんの存在を知っていただくきっかけとなりました。写真は、その個展会場での草間さんとのツーショットです。

数多くの展覧会を担当し、草間さんや奈良美智さんなど世界的に活躍するアーティストたちとともに、日本の現代アートが世界に発信される時代を過ごしてきました。このようにアートの仕事、美術の道へと進むことになったのは、津高でのある出来事が出発点です。美術の授業で女性モデルを描いたクロッキーに故・森谷重夫先生が、採点で最高点の5の横にぐるぐると何重もの丸印をつけてくださり、これまでつけたことのない最高得点だと褒めてくださったのです。生徒数が少なかった美里中学校から津高へと進学し、自信が持てなかった日々の中で、自分に対して大きな自信を持てた瞬間で、今でもその時の教室の様子を思い浮かべることができるほどです。

この数年、アーティストや美術館の学芸員、編集者たちから、「あの展覧会を見て作家になろうと思いました」、「あの展覧会でアートを好きになりました」、「自分の生き方が変わりました」と、私が携わった展覧会のことを話してくださる方々と出会うことが多く、美術、芸術には人の生き方に影響を与えたり、大きなパワーをもたらすことを実感します。これからも、人との出会いを大切に、一人でも多くの方がアートと出会っていただくことを願い、仕事をしていきたいと思っています。

（アート・コーディネーター）

動物に触れて

河村泰秀（昭和59年卒）

メインクーン、ウィペット、フェレット、チンチラ、フクロモモンガ、ハリネズミ、ヒョウモントカゲモドキ、フトアゴヒゲトカゲ。何の動物種か、またその姿形が思い浮かべば、かなり動物好きな方だと思います。私は地元（一身田）で動物病院を開業し二十年余りになります。

昭和五十六年に津高に入学しました。不真面目な生徒で、酷い成績でしたが、友人は多くそれは楽しい毎日でした。動物好きで将来獣医となり動物園や野生動物保護の仕事に携わりたい夢がありましたが、私の成績では遠い夢のまた夢でした。

高二の担任である木村満利先生とお会いし、不出来な私を叱咤激励していただいたことで今日があります。

家庭科なので男子生徒の授業は無いはずですが、常に先生の部屋には生徒がたむろしていました。

何とか北海道の酪農学園大学に入学し、アウトドアに目覚め道内各所を周遊したり、長期休みには名古屋市の東山動物園、札幌市の円山動物園で実習をしていました。

大学では四年から各教室に所属しいよいよ獣医学を深めていく時期です。解剖、生理、薬理、病理学等の基礎系と内科、外科、繁殖学等の臨床系の教室に分かれます。

私が所属した病理学教室は北海道という地域背景もあり、当時実に解剖が多く年間二百～三百頭程（九割が乳牛、あとは肉牛、馬）を剖検していました。剖検とは動物を解剖し各臓器の肉眼的、また顕微鏡による組織学的所見で病気の原因や死因を調べることです。

解剖浸けの毎日に、生涯で自分はこれだけの動物を助けられるの？と大いなる疑問に悩まされながらも当時の教授の教え「病因解明する事を持って魂を見送れ」を肝に銘じ、支えにもしました。

卒業後、動物病院に勤務し、月に三日の休み以外は二十四時間体制（急患や帝王切開）で働いていました。

若かったのと臨床経験が無かったので、語弊がありますが毎日が興味深く新鮮でした。

獣医療では、その動物の一生を診る事が出来ます。幼年期、成年期、老年期の各疾患、特にヒト同様に寿命が延び、腫瘍疾患、心疾患、内臓疾患等付き合う病気も多くなっています。更に先に述べた各動物種によっても病気や治療が異なります。獣医師となり、話が出来ない彼らとコミュニケーションの日々です。

よく見る、嗅ぐ、触る事で如何に病気のサインに気付けるか？今も緊張の毎日です。

ヒトの生活は便利になり、スマホで珍獣や可愛い動物も直ぐに調べる事も可能です。AIBOなる犬型ロボットも再販され人気の様ですが、それらに生命の鼓動は感じられません。日々、気忙しい生活の中で皆様も一息ついて動物の温もりを感じてみて下さい。

（河村ペットクリニック）

離れて気付く〝ふるさと〟

橋爪 秀範（平成元年卒）

三重で暮らすのはおよそ三十年ぶり。津高卒業後に進学のため上京して以来です。

津新町駅界隈の様子がずいぶん変わっていたことには驚きましたが、変わらぬ場所に建っている津高の校舎を見て、高校時代を懐かしく思い出しました。高校時代はお世辞にも良い生徒ではありませんでした。追試の常連でしたし、当時の先生方にはさぞご迷惑をおかけしたことと思います。

NHKに入局して二十五年、これまでに七回転勤して岐阜や群馬、富山などに赴任しました。

災害などの緊急報道や生中継、ニュースキャスター、ステージ司会、野球実況など、さまざまなことをやってきました。

先ほど三重に暮らすのは三十年ぶりと書きましたが、実は二年ほど前に三重で仕事をする機会に恵まれました。卒業生の中にも関わった方が多くいらっしゃると思いますが、伊勢志摩サミット関連の取材でした。

当時の私は、二十年ほど続けたアナウンス業務をいったん離れ、ラジオを制作する部署でディレクター業務を中心に行っていて、夕方のニュース番組内で時事問題についての特集コーナーをひたすら作っていました。連日の業務に追われ、精神的にもかなり疲れている時でした。

そんな中で伊勢志摩サミットが開催され、もともとアナウンサーの私がリポーターとして派遣されました。もちろんサミット会場の賢島には近づけませんし、外国語を話せるわけでもありませんので、開催地の様子、サミットの影響などを電話リポートする役目です。

三重出身ということで、ある程度は開催地の地理もわかるだろうという理由からの起用でしたが、久しぶりに地元に戻って仕事ができることが、行く前からちょっと嬉しかったのを覚えています。

伊勢神宮前や賢島近辺の町の厳重な警備状況や住民の反応、伊勢市に設けられたメディアセンターの様子などを、三日間にわたって十分ほどラジオで全国に伝えました。

ラジオは人手が少なく、私は一人で走り回っていたのですが、いきなり取材だと言って飛び込んだ四十過ぎのオジサンに、地元の方々は誰もが丁寧に対応してくださいました。

鵜方の駅前では、取材原稿をまとめようとしている私にお土産店の方が「ここを使って」と店内の机と椅子を勧めてくれました。

毎日慣れない仕事がうまく進められずに悩み、心が弱っていた私にとって、わずか三日間の三重での時間が大きな救いになりました。人の温かさはもちろん、子どもの頃に親しんだ風景、空気、そして言葉の中に身を置くことが心に安らぎを与えてくれ、長く離れていたからこそ故郷の存在の大きさに気が付きました。

これからはその故郷での勤務です。今は月末金曜日のFM番組「みえDE川柳」を担当しているほか、平日夕方の「まるっと!みえ」にもときどき出ます。

私が一番心がけているのは、隣近所の人みたいなアナウンサーであることです。テレビやラジオで、いつも会っている知り合いが話しているような、そんな雰囲気を大切にしています。まだまだ大変未熟者ですが、皆様に寄り添った放送ができるよう努めていきます。

（NHK津放送局）

厳選された学生をスカウトできる『ガクセン』で日本を支える

中小企業の採用課題を解決する

津田 武（平成9年卒）

会社を設立して十年が経ちます。主な事業は、『ガクセン』という新卒採用メディアの運営です。『ガクセン』とは「学生選抜」の略で、審査によって選抜された優秀な学生のプロフィールを常時四〇〇～五〇〇名を掲載して、企業とのマッチング支援を行います。学生プロフィールの詳細は、活動歴や身に付けた力など三〇〇〇字に及ぶボリュームで、一人ひとりの学生に二時間かけて取材を行い、制作しています。

リクナビやマイナビなど学生が企業にアプローチするサイトとは全く異なり、『ガクセン』では、企業から学生にアプローチします。

従来型のナビサイトでは、知名度やブランド力の高い企業に閲覧・応募が集中する傾向にあります。結果、中小・ベンチャー企業はどんなに優良企業であっても、成長の可能性を秘めていても、学生に見つけてもらえない。一方、学生側に目を向けると、大手企業に応募しても、実力があるにも関わらず、学歴フィルターにかけられて書類選考を通過できないケースも多い。そんなアンバランスな状況を何とかしたかったのです。

また、『優秀』の指標は学歴ではありません。自発的に考えることができ、行動にまで移せる勇気を持っているかどうか。一〇〇人中三～四人ほどしかいない、一握りの人材です。ですから優秀な学生がいると聞いたら、新幹線に乗って会いに行くこともあります。

今後の事業展開は、まさに中小企業に向けた、採用支援の強化です。キラリと光る技術や、尊敬できる理念を持つ中小企業はたくさんあります。例えば、一般には知られていないけれど、NASAに納品する特注ネジを作っているような。しかし、そういった企業はなかなか表には出てこないし、特に就活においては、学生から検索されづらい。結果、優秀な人材を獲得できないのです。また、後継者や技術者不足で悩んでいるところも少なくありません。従来の採用制度のままでは、優れた企業や技術が廃れてしまい、ひいては日本経済そのものが衰退してしまうでしょう。でも、『ガクセン』ならそんな企業と幹部候補レベルの優秀な学

生を結び付けることができる。企業にも学生にも、ブレークスルーとなる機会を提供し、「明日のニッポンの元気」に少しでも貢献していきたいと思います。

さて、そんな私の学生時代ですが、実は津高校では最下位の成績で、偏差値も15ほどしかありませんでした。それでも大学受験までの最後の半年間、一日十六時間の勉強を行い、赤本を三〇〇回こなすことで、何とか法政大学に現役で合格することができました。

しかし、そんな大学にもほとんど行かずネット中毒となり、食事と睡眠以外はずっとインターネットをする毎日でした。そんな中、自分でメディアサイトを運営したり、友達との起業ごっこの一貫で、企業をドアノックしてホームページの受託開発を行ったりしていました。右も左も分からない状況でのスタートでしたが、この時の経験やバイタリティがまさに今の会社経営にも活きています。行動を起こした学生にいろいろな機会を提供したい、という『ガクセン』のルーツは、実はこの自分自身の学生時代の体験から来たものだったのかも知れません。

（ニューインデックス株式会社　代表取締役社長）

現役図書委員と交流

田川　敏夫（昭和32年卒）

十月十日、図書部ＯＢ会の山紫会と図書委員との交流を持ちました。山紫会は、長年図書館長を勤められた故三ツ村健吉先生を慕うＯＢの集まりです。

当日は二十八年卒から三十五年卒の十三名が、現役の図書委員十五名と平世紀を越える世代の差を感じさせない熱い交流をしました。部活としての図書部はもうありませんが、図書館活動を愛する共通の思いに、青春時代が甦り、時の経つのも忘れる母校訪問でした。この様な交流を深めることで図書館活動が活発になることを願っています。

音楽部　全国大会金賞受賞

顧問　北後知尋（平成8年卒）

平成三十年十月二十七日（土）長野県で開催されました第七十一回全日本合唱コンクール全国大会（全日本合唱連盟・朝日新聞社主催）に於いて、中部地区代表として、高校Ａグループ（8～32人構成）に初出場し、しかも全国大会金賞二位（長野県知事賞）という成績をおさめることができました。創部六十九年目にしての快挙ということで各方面から賞賛の声をいただいております。これからも精一杯努力致します。

進路状況

豊田　貴之

平素より、本校の教育活動、進路指導にご理解ご協力をいただきまして、誠にありがとうございます。心より感謝申し上げます。私は今年度から進路主任として、本校発展の一翼を担うこととなりました。生徒たちの希望する進路が実現するよう、全力を尽くして職責を果たして参ります。

さて、現一年生は記述式が導入される「大学入学共通テスト」を受験する初年度に当たる学年です。急速に変化する社会の中、入学者選抜試験においても、知識・技能力のみならず、「思考・表現力」や「学びに向かう力」等が求められることとなります。しかしながら本校は従前より、生徒自身がそれらの力を身に付け、また新たな可能性に気づくための環境を整えて参りました。例えば、恒例となっている東京大学キャンパスツアーです。毎年多くの生徒が参加し好評を得ているこの行事は、本校卒業生の方々からたくさんの刺激を受け、高い志を持ってその後の高校生活を送ることにつながる大きな契機となっています。このような活動に積極的かつ全力で取り組むことで本校生徒は大きく成長し、大学入試はもとより、社会に出てからの様々な課題をも乗り越えるための力を付けていくことと思います。

昨年度の生徒たちも大変よく努力し、素晴らしい結果を残して本校を巣立っていきました。現三年生も入試を目前に控え、進路希望実現に向けて一所懸命学んでいます。同窓会の皆様には、今後とも後輩たちに手厚いご支援、ご指導を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

（大学合格者数）

	国立	公立	私立	短大
(2018) H30年	200	40	703	15
(2017) H29年	199	23	648	9
(2016) H28年	194	35	748	15
(2015) H27年	192	38	780	7
(2014) H26年	230	51	766	16

	北海道	東北	東京	一橋	東工大	名古屋	三重	三重・医・医	京都	大阪	神戸	九州	慶應	早稲田	同志社	立命館
(2018) H30年	4	0	5	0	0	16	64	8	11	11	8	2	5	17	68	93
(2017) H29年	2	1	5	0	1	15	73	5	14	13	18	2	6	5	63	71
(2016) H28年	3	0	3	1	0	22	64	7	13	11	10	2	6	7	69	113
(2015) H27年	3	2	3	1	1	22	60	4	12	14	5	1	5	13	92	106
(2014) H26年	7	1	4	0	0	15	68	10	10	14	11	0	2	17	76	116

◆「有造塾」開催！

第7回

日時　平成29年12月1日(金) 13時30分～15時20分
場所　岡三デジタルドームシアター神楽洞夢
〈演題〉宇宙天気予報と発展途上国支援
〈講師〉上野　悟氏（平成2年卒）

第8回

日時　平成30年10月1日(月) 11時00分～13時00分
場所　津高等学校体育館
〈演題〉イメージセンサ開発に従事して
〈講師〉寺西信一氏（昭和47年卒）

第七回 有造塾に参加して

三年九組　松井　かずさ

私は宇宙天気について、どういったものかわからないものの興味があったので、この講義はとても有意義な時間になりました。

一番印象に残っているのは、宇宙天気を予測するには必要なことがかなり多いということです。さまざまな現象からアプローチし、緻密な計算によって初めて一つのことがわかるという複雑さや、世界との連携の必要性を知り、研究の奥深さを感じることができました。そして、今の宇宙天気がインターネットで検索するとすぐわかるほど身近なものになっているということに驚きを感じ、こうなるまでに数多くの研究がなされてきたのだと考えると、文明は先人の努力の結晶であると思いました。

分野はかなり異なりますが、私は将来研究職に就きたいと思っているので、研究という世界の広さに一層興味と希望を抱くことができました。お忙しい中、ありがとうございました。

第八回 有造塾に参加して

一年九組　加納　淳嗣

私は寺西先生の講演を聴いて、シリコンの特性とそれをうまく利用してイメージセンサを作り上げる技術に感動しました。

まず、半導体であるとは抵抗率が変わる性質を持つことであり、それは熱やシリコンの組成の変化で生じる性質であることに、シリコンの奥深さを感じました。

そして、シリコンのバンドギャップを調整し可視光線のみを捕らえる技術を基礎に、新たなイメージセンサを作り上げてきた技術者達の実例を知って、こういうことを技術の進歩というのだと思いました。寺西先生の埋め込みフォトダイオードのように、一つ進歩するだけで世界中のカメラが変わり、別の分野では望遠鏡や胃カメラが進化し、コンピューターを介して私たちの生活がより便利になっていくという技術の進歩の魅力を感じました。

最後に寺西先生が心がけていることとして、先生は知っていることより知らないことの方が多いから分からないことはメモをするそうです。私はこの積み重ねが自分の知らないことを知っていることに変えていく鍵だと思いました。これからは自分が勉強する中で分からないことを分かるようにしていくことを大切にしていきたいです。

ボートと出会って

三年六組　中尾　咲月

私とボートとの出会いは、新入生の部活体験でした。三年生の先輩に半ば強引に「乗ればわかるから」と言われ顧問の車に乗せられて川まで連れて行かれました。そこで初めてボートに乗った時、風の気持ちよさに感動し、先輩の言葉の意味がわかり、ボートというスポーツに惹かれました。後日、自分の意思で、もう一度ボートに乗りに行き、「やっぱりこれしかない」と思い入部を決めました。入部してすぐはボートを漕ぐのがただただ楽しくて、毎日部活に行くのが待ち遠しかったです。

高一の十一月にエルゴメーター（陸上でボートの動作を再現し、身体能力を測定できる器具）での全国ランキングづけがありました。

私は十位になり、十二月の日本代表候補合宿の参加権を得ることができました。まさかそんな上位に入れるとは思ってもいなかったので本当に驚きました。合宿は初めてで初対面の人達ばかりだったのでとても緊張しました。しかし、レベルの高い人達と練習でき、いい刺激になりました。

私のボート人生を大きく変えたのは、高一の一月に参加した近畿のエルゴ大会でした。そこでワットバイクという体力を測定する器具を体験しました。その測定結果は、東京オリンピックでメダルを狙えるような選手を育成するプロジェクトの二次選考となっており、それをきっかけに強化合宿に参加させ

左から2番目が中尾

てもらえることになりました。

高二の間は、月一回のペースで合宿に参加しながらインターハイや国体にも出場しましたが、結果は振るわず、苦い経験もたくさんしました。でも、合宿に参加することで少しずつ自分が成長していることは感じていました。

そんな中、十一月に高一の時と同様の全国ランキングづけで一位になり、日本代表候補合宿に参加しました。十二月、一月、二月と選考に残ることができ、高三の四月末から五月にかけて、仏独遠征に参加しました。初めての海外遠征は環境や食事、言語の違いに戸惑いましたが、ボートに夢中になれるのがとても楽しかったです。また、普段の一人乗りのボートではなく、四人乗りのボートを漕げるのも嬉しかったです。この遠征の結果、世界ジュニア選手権の出場が決まりました。初めは世界という舞台に立てるということに全く実感が湧きませんでした。

六月にはアジアジュニア選手権で三位という結果を収めることができ、仲間と勝利を掴めたことへの嬉しい気持ちと、少し悔しい気持ちの両方を味わいました。この大会を通して、今まで以上にボートが好きになりました。

八月の世界ジュニア選手権では、なかなかうまくいかず、結果を残すことはできませんでしたが、世界という舞台に立てたことは自信につながりました。

ボートと出会って私の人生は大きく変わりました。これまでの結果に満足することなく、高校三年間で得たたくさんの経験やお世話になった方々への感謝の気持ちを忘れずに、世界を舞台に戦える選手になりたいと思います。

第九回津高同窓会ゴルフ大会

菱井光生（昭和44年卒）

第九回津高同窓会学年対抗ゴルフ大会が、四月二十二日青山高原カントリー倶楽部で同窓生一四五名が参加し、盛大に開催されました。

昭和44年卒業生チームは、同期生十一名と当時担任団の佃先生の計十二名のラウンドとなりました。私は、同期の小川悟君と後輩の方二名の組み合わせでのプレーでした。スタート直後、後輩二人のティーショットの飛距離には度肝を抜かれましたが、ゴルフはあがってなんぼと心を落ち着かせました。

私達昭和44年卒業生は、二十名前後が年四回コンペを行っております。また私事ではありますが、月一回のこの青山高原カントリーでコンペに参加しております。このような事が、今回の学年優勝、個人の優勝の一因かもしれません。

最後になりましたが、毎年このような盛大な大会を企画・運営していただいている飯田同窓会長はじめ、実行委員会の皆様に心より深くお礼を申し上げます。

第八回津高同窓会テニス大会

柳川豊（平成11年卒）

十月十四日、明け方の雨も上がり、無事第八回津高校同窓会テニス大会が開催されました。まず初めに、天候に左右されやすい競技にもかかわらず毎年このような素晴らしい交流の機会を作っていただいている実行委員の方々、準備や後片付けをしてくださる顧問の先生や部員の皆様に厚く御礼申し上げます。

今年は、同窓生三十五名・在校生十四名が参加、六チームに分かれて団体戦を行いました。大先輩から現役の部員たちまで、世代や性別を超えて共に協力し合えるテニスというスポーツの素晴らしさを今年も体感することができました。また、「県大会でベスト4」、「結婚した」など様々な報告ができる機会でもあります。私もやっと「司法試験合格」の報告をしました。

私達の世代がもっと積極的に参加をして受け継いでいかなければならないと真摯に受け止め、大会が続くことを願います。

各地で同窓会開催

東京同窓会

平成三十年度の東京同窓会は、五月二十六日、例年通り霞が関ビル三十五階の東海大学交友会館にて、一九七名の参加を得て盛大に開催されました。

総会では、田村東京同窓会会長の挨拶に続いて、事務局より事業報告と会計報告がなされました。来賓紹介に続き、飯田本部同窓会会長、中川津高等学校校長よりご挨拶を頂戴しました。

招待恩師の飯田（浅山）宏先生（津中24年卒）、鎌田敏明先生（津高46年卒）の紹介に続き、特別講演として、山家又祐さん（46年卒）より、「ヒトにもかかる〝越境性動物感染症〟」のテーマにて、感染症のリスクとその備えについてお話を頂きました。

三輪名古屋同窓会副会長による乾杯のご発声を受けて歓談が始まりました。

新人会員九名の紹介、来年度幹事今北理さん（47年卒）の決意表明に続いて、全員で校歌を高らかに斉唱し、来年の再会をを約束して、皆さん名残惜しそうに帰路につかれました。

小林英俊（昭和46年卒）

名古屋同窓会

今年度名古屋津高同窓会は十月六日、東急ホテルに於いて、参加者一一二名で開催されました。カンツォーネ歌手の前迫實様にお越しいただき、『津高から始まった私の歌人生』というお話とともに歌って頂きました。素晴らしい歌声に、まるでコンサート会場にいるような気分になり、とても素敵な時間を過ごすことができました。幅広い分野でご活躍されている先輩方がいることも、改めて誇りに思いました。

その後、総会、懇親会と続き、今年は毎年恒例津高クイズではなく、じゃんけん大会で盛り上がりました。

最後は津中、津高女、津高の校歌を皆で歌い、平成最後の津高名古屋同窓会もお開きとなりました。これだけ幅広い年代の先輩方にお会いできるのも伝統、歴史ある津高校だからこそだと感じました。

桝田千裕（平成20年卒）

大阪同窓会

第五二回大阪同窓会は十一月四日天王寺都ホテルにて、昭和17年卒から平成30年卒まで、一三三名の方々が集いました。

十七年間会長を務められた奥田務氏の挨拶に引続き、ご来賓の方々よりお祝辞を賜りました。新役員として会長の岸野文郎氏（昭和40年卒）、副会長の土屋久美子、宮武克昌、松本哲治の三氏が紹介されました。

講演は、歯科医師横田若生氏（昭和54年卒）の「超高齢社会における口腔ケア」を、ユーモアを交えながらのお話で勉強させていただきました。

懇親会では、恒例の卒年ごとのテーブルから、在校時に住んでいた地域ごとのテーブルに移動し、時代を超え故郷を懐かしみながらの歓談に盛り上がり、校歌を最後に、再会を約束して閉会しました。山本尚弘（昭和47年卒）

物故者

（平成30年10月15日現在）（敬称略）

謹んでご冥福をお祈りいたします。

旧職　上野喜久生
旧職(16)　長澤哲史
旧職(17)　国府(平松)義三郎
旧職(20)　中塚(野島)美よ古
旧職(24)　森川治人
旧職(26)　鈴山寛
陳川昭7　伊藤廣二
昭13　岩見孝
昭13　田垣内愛治
昭13　辻二郎
昭14　齋藤竹生
昭15　亀田達
昭16　武田秀雄
昭16　村田吉郎
昭17　御給衛
昭17　豊田量雄
昭17　堀川晃
昭18　中村隆太郎
昭18　藤波健一
昭19　岩大路(浅山)馨
昭19　近藤昭朗
昭19　鈴木逸平
昭19　田中(井田)修
昭19　若林碩
昭20　赤塚俊一
昭20　市野喜和
昭20　梅本和男
昭20　服部一弥
昭20④浅山光典
昭20④海老原武夫
昭20④岡田宗一
昭20④小林利武
昭20④服部才和
昭22　藤波博典
昭22　牧戸(長谷川)二彦
昭22　牧野淳二
昭23　高尾昭夫
昭23　平井邦和
昭20入川口正
昭20入長谷川全美
昭21入浅尾戍
昭21入横田稔
三重桜昭6　大森(冨田)いく
昭7　落合(上田)シナ
昭7　藤田(川本)久子
昭10　大森(杉本)きみ
昭11　大久保(斎藤)春子
昭11　北野(生田)すみ子
昭12　稲垣(松岡)ヒデ
昭12　紀平(細野)たまゑ
昭12　黒川(蓑浦)敏子
昭12　佐竹(橋本)敏子
昭13　鈴木秋子
昭14　大久保(高山)和子
昭14　野田(大原)美代子
昭14　山城(増田)美代子
昭15　安井(山舗)美穂子
昭16　小林靖子
昭16　中山(梅本)隆子
昭17　池永(生形)美恵子
昭17　高森(中西)美代子
昭18　浅山(杉本)てる
昭18　尾鍋(金児)道子
昭18　成瀬(山中)令子
昭19　岩村(真野)とし子
昭19　喜多(大西)厚子
昭19　高橋(岩崎)八重子
昭19　土屋(蓼沼)智世
昭19　西脇(村田)蕗子
昭20　清水(谷口)延子
昭20　中塚(野島)美よ古
昭20④田中悦子
昭24　須﨑テル子
昭24　宮口(川喜田)熙子
津高昭24　海住嘉之
昭24　秦周平
昭25　青山弘
昭25　小川石長
昭25　川本(大河内)倫代
昭25　吉峯(中村)トシ子
昭26　飯田高司
昭26　伊東定美
昭26　伊藤和廣
昭26　柴田靖之
昭26　辻敬太郎
昭26　中村純三
昭26　服部龍治
昭26　橋爪洋之
昭26　林薫
昭26　松岡重男
昭26　山岡きみ
昭26　吉川恒憲
昭28　河内隆
昭28　徳田(後藤)芳子
昭29　高橋(高野)典子
昭29　田中嘉計
昭29　古市恒夫
昭29　吉川(近沢)弘子
昭30　山村和生
昭31　猪俣重信
昭31　今井(山舗)芳子
昭31　大橋(野田)裕子
昭31　前川正明
昭32　山本(大橋)宏子
昭33　伊藤武
昭33　江藤博久
昭33　亀田昌行
昭33　杉本光
昭33　中田敏
昭34　鈴木寛
昭34　山口晃吉
昭35　寺田靖夫
昭36　川村英樹
昭36　高橋靖輝
昭36　瀧本勲
昭37　高嶋良二
昭37　松山雅昭
昭38　伊藤(村田)節子
昭38　大杉義史
昭38　金丸(天野)陽子
昭38　川崎喜久夫
昭38　後藤(田村)寛子
昭38　坂崎勉也
昭38　桜木(稲垣)礼子
昭38　高楠禎
昭38　舟橋(吉川)日出子
昭38　堀内俊之
昭38　山岡(古川)隆子
昭38　山野(永田)光子
昭38　三上秀樹
昭41　小川治彦
昭41　杉浦(加藤)美知子
昭44　黒田(花谷)恭子
昭46　稲垣雅敏
昭46　大橋弘幸
昭48　鈴木一郎
昭50　桑名康文
昭50　高田(岩田)葉子
昭52　伊東一仁
昭57　横山仁司
昭58　河合龍哉
平元　伊藤邦博

お知らせ

二〇一九年度 **総会・パーティー**

日　時　二〇一九年八月三日(土)　午後三時より

場　所　**メッセウイング・みえ**

テーマ「つなぐ」

担当学年幹事　昭和61年卒（代表　落合　賢治）
平成10年卒（代表　榎本　貴之）

平成三十年度総会・パーティーを終えて

鈴村　良典（平成9年卒）

平成三十年度陳川・三重桜・津高同窓会総会・パーティーが、『向日葵のように輝いて～永遠の十八歳～』というテーマで、八月四日(土)、津センターパレス及び津都ホテルにおいて、盛大に開催されました。陳川・三重桜からは十六名、津高からは七四八名、来賓・恩師を含めて、総勢七六七名の方々にご参加いただきました。

総会では、物故者への黙祷、飯田会長・中川校長先生のご挨拶、代議員会の報告が行われ、続くパーティーでは、樽酒による鏡開き、陳川・三重桜の先輩インタビュー、応援団OBによる演舞、そして、校歌斉唱では、皆で肩を組み、歴史ある母校への想いを確かめ合いました。

幹事学年によるオリジナル企画としては、センターパレスでは日本舞踊とピアノ演奏を、都ホテルでは能〈謡〉とピアノ連弾を披露していただきました。さらに、十八歳の頃に戻っていただこうと、受付前には顔出しパネルを設置し、好評をいただくことができました。

不慣れな点も多く、幹事として至らない点もあったかと存じますが、また来年も元気なお姿で皆様と再会できることを祈念いたしまして、本年の心よりの御礼ならびに報告とさせていただきます。

会場・津都ホテル

二〇一九年度総会・パーティーのご案内

実行委員長　落合　賢治（昭和61年卒）

同窓生の皆様におかれましては、益々健やかにお過ごしのことと存じます。来年度同窓会は昭和六十一年と平成十年卒業が担当させていただきます。主な目玉は同窓会会場が二十三年ぶりに「メッセウイング・みえ」になったことです。一堂に会せる会場で開きたいという皆様の強い要望に応えようと幹事学年が決断致しました。交通の便も良くなり、会場においても精一杯のおもてなしの気持ちでお出迎え致しますので、多くの方々の参加をお待ちしております。特に若い世代の方の参加が近年減少しておりますので宜しくお願い致します。テーマは〝つなぐ〟。会場をつなぐ。現元号から新元号へつなぐ。未来へつなぐ。陳川・三重桜・津高をつなぐ。いろいろな思いがあるかと思いますが、来年度同窓会でひとつにつながりましょう。

参加者募集……

★**第十回　学年対抗ゴルフ大会**

期　日　二〇一九年五月六日(月・祝)
場　所　タートルエースゴルフクラブ
　　〇五九五―八三―一二一二
参加費　一三、〇三〇円
　　(プレー費・昼食・ドリンク券二枚・パーティー代・会費含む)
　　キャディは別途
定員　百六十名（定員になり次第〆切）
※厳守・各学年三名以上十六名以内
※練習ラウンドの設定あり
※お問い合せ・お申し込み先
　津高同窓会事務局
　〇五九―二二九―七三三一

津高同窓会のホームページ
http://tsuko.jp/
メールアドレス
office@tsuko.jp
TEL・FAX 059-229-7331

事務局だより

○会報第五十六号をお届けします。今回は二万四千四百部の発行です。

○創立一四〇周年にむけて

津高が二〇二〇年に創立一四〇周年を迎えるにあたり、同窓会では、記念行事を企画検討しています。現在、名簿発行と経ヶ峰登山が決定しています。

名簿発行はサラト㈱に委託しており、来年より、会員の皆様宛に住所等の確認葉書をサラトより郵送しますのでご協力お願いします。

名簿は二〇二〇年一月の発行予定です。

○昭和31年・32年・35年・36年卒の方々がそれぞれの同期会開催前に学校を訪問されました。

写真は昭和35年卒の皆様

○最新情報は、是非ホームページをご覧ください。